

思い込みにとらわれずに広く新しい視野を

総合情報基盤センター センター長 栗本 猛
(教養教育学系 教授)

この広報の前巻(18巻)で「忘れた頃にやってくる災いへの備え」という題で巻頭言を書きました。凶らずも、令和6年元旦に能登地方を中心とする大きな地震が発生しました。幸いにして当センターに大きな影響は出なかったのですが、地震は北陸地方に多大な被害をもたらしました。前の巻頭言中で「日頃から最新の情報を収集し、何かあったときにどう対応するかを心がけておくことです。」と記していましたが、今回の地震へ十分な心構えができていたかと問われれば、自信をもって「はい」とは言えません。同じ文章中に「想定外のことは起こりえます。」とも記しており、今回ほどの大きな地震は想定外だったとも言えそうですが、この地震の前から能登地方で群発地震が続いており、後から考えれば想定可能だったのではと思います。私自身は1995年の阪神淡路大震災を経験しています。たまたま京都のホテルに宿泊していて無事だったのですが、当時住んでいたアパートの周辺は震度7でした。その当時は、(地球規模から見れば)たかが三十数年の経験だけから「関西には大きな地震は来ない。」と根拠もなく思い込んでいました。長いスパンで見れば日本のどこででも大きな地震は起こりうるという視点に欠けていたのです。

人は、「こうであってほしい。」「こうなるのが当然だ。」というバイアスに影響されて誤った結論を思い込んでしまうことがあります。地震が来ないと思い込んだのも、来てほしくないという願望に引きずられていたのでしょう。確かな結論を得るには、不確かな思い込みを避けて、信頼性のある根拠に基づいた分析と論理的な考察が必要です。フェイクニュースやいいかげんな噂に流されないためには情報源の確認と検証が重要です。昨今、強化されているデータサイエンス教育においても

データの信頼性をチェックする姿勢を持つことが求められています。

科学の新発見には古い常識からの脱却が必要な場合がよくあります。天動説は日常の経験からは当然と思われても、精密な天体観測データを無理なく自然に説明するのは地動説です。常識は大切なものですが、それは我々の経験から導かれたものなので、経験の範囲から外れると通用しなくなることが多々あります。科学技術が進んで広大な宇宙やマイクロな原子レベルでの事象の精密観測が可能になると新しい考え方が必要になり、科学の内容が書き換えられてきました。天動説から地動説のように丸ごと変わってしまった場合もありますが、それまでの説を発展させてより精密化された場合が多いでしょう。一步ずつの小さな進歩が人類の視野を広げてきました。そこで重要となったのは主観的な思い込みを排除し客観的に観測・実験データを分析して新しい考え方を受け入れる姿勢です。

ITCの世界は進歩が激しいので、常々新しい情報に接するようにしないと時代に取り残されてしまいます。慣れ親しんだものから新しいものに乗り換える必要性に迫られると、面倒だという気持ちが出てくることもありますが、それで何がしかが改良され、機能が拡張されるのなら仕方ありません。この広報は総合情報基盤センターの新システムの特集です。今回の新システムは旧来のものと構成は概ね同じですが、PCやソフトは新しいものになりましたし、ディスクの拡張等も行っています。移行に際してはユーザーに不便をおかけしたことをお詫びいたします。時代の進歩についていくためにも次のシステムをどうするかを早々に検討していかねばなりません。ご意見等をよろしく願います。